



書評

矢吹康夫

立教大学社会学部 助教

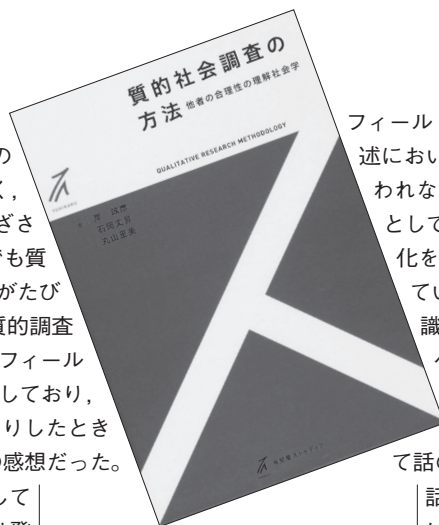
本書は、初学者向けに書かれた質的社会調査の教科書である。「読んで面白く、現場でも役に立つ」ことがめざされており (ii ページ)、本文中でも質的調査の「魅力」や「醍醐味」がたびたび強調されている。私も質的調査についての講義科目や学生をフィールドに送り出す演習科目を担当しており、教員の立場で困ったり迷ったりしたときに使えるなというのが初読の感想だった。

著者たちがこれまでに指導してきた学生・ゼミ生がときおり登場してはいい役回りを演じてくれているのだが、初学者が陥りがちな思い込みや不安や葛藤をほぐして、気負わなくても大丈夫だと背中を押してくれる教科書である。

たとえば、どこかから借りてきた理論や概念を、つい事例にあてはめてしまう初学者の気持ちは、社会的に意味のあることを言わなければならないという怯えからきているように思う。だが、それに対しても本書は、まずは面白さを先に置き、いかにしてそれ

を社会的に意味あるものに昇華していけばよいか教えてくれる。既知のものや捉え方で事例を見るような「ゴシップ的な面白さ」では、他者は結局不合理なままに描かれ、調査者のもっている常識を補強するだけで終わってしまう。そうではなく、自身の常識をくつがえし、ものの捉え方をバージョンアップしてくれるような他者の合理性に迫ることができた調査研究が、「社会的な面白さ」を獲得し、代表性はなくても十分に社会的に意味のあるものになりうるのである (103-105, 118-119 ページ)。

このように著者たちは、それぞれの「経験則」をもとにしながら具体的な技法や視点を示してくれる。いくつか要約すると次のようなものである。



質的社会調査の方法

他者の合理性の理解社会学

岸 政彦

石岡丈昇

著

丸山里美

有斐閣
2016年
A5判, 272ページ
2,052円

フィールドでの振る舞いや研究成果の記述において中立性や客観性に過剰に囚われなくてもよい。それよりも、何者として参与したのかというカテゴリー化を自覚し、どのような主観をもっているかという調査者の構えに意識的であることが大切である (70 ページ)。こうした調査者の先入観や思い込みをくつがえすような新しい語りは、往々にして話の支流や脱線、関係のない世間

話から生まれるのだから、インタビューの場を統制しすぎる必要はない (209 ページ)。また、誰がやっても同じ結果が得られるという近代科学が前提とする信頼性には固執せず、「あなた自身にしかできない」という固有性が奨励される (93 ページ)。複数の視点を超越したところから俯瞰して「多様な解釈がせめぎあっている」程度のことを言うくらいなら、調査者がどの視点から事例を見ているのかという「バイアスを公言」し、自己言及的な記述によって透明性を担保すればよい (113-114 ページ)。

このように本書では、従来の実証主義的な社会調査観においてはやってはいけないと禁止されそうなことも推奨しており、初学者を迷いや怯えから解放してくれるのだが、かといって奇をてらっているわけではない。個人の生活史を歴史と社会構造のなかに位置づけ直すことをとおして (227-229 ページ)、一見して不合理な行為の背景にある他者の合理性を記述・説明し、そこで得られた理解を人びとと共有する。そうすることで自己責任論を解体するのが質的調査に立脚した社会学のひとつの目標とされており (33-34 ページ)、社会的想像力の発揮という点ではむしろ王道をいく教科書なのである。